

## 伴走パートナーとして、ケーブルテレビ業界の未来を切り拓く

シンクレイヤ  
新社長に聞く



ケーブルテレビ事業をはじめとする放送と通信の融合領域で、常に最先端の技術に挑戦し、機器開発・販売・保守までを一貫して提供するシステムインテグレータ、シンクレイヤ(株)(愛知・名古屋市)。1962年の創業(当時、愛知電子(株))以来60年以上の歴史を有する同社に今年3月26日、新しいリーダーが誕生した。先代から約32年ぶりの社長交代となった若きリーダー、35歳の山口倫正氏にケーブルテレビ業界や自社事業の展望等を聞いた。

山口倫正氏 シンクレイヤ(株) 代表取締役社長

山口倫正 Yamaguchi Norimasa  
1991年5月1日生まれ。2014年3月名古屋大学工学部卒、18年4月シンクレイヤ(株)入社。23年4月同社経営企画室長。24年3月取締役経営企画室長。25年3月常務取締役技術生産本部長兼広報室長を経て、26年3月代表取締役社長に就任。

### ケーブルテレビ、コンサルを経てシンクレイヤへ入社後すぐの端末開発で自社の魅力を体感

—これまでのご経歴を教えてください。シンクレイヤ入社の前に社会人経験をお持ちでしょうか。

山口:大学卒業後、名古屋のスターキャット・ケーブルネットワーク(株)(現スターキャット(株))さんに3年間お世話になりました。これは会長(父)の意向で、「業界の中でシンクレイヤがどう見られているかを外側からしっかり見てきてほしい」という思いがあったのでした。スターキャットさんには右も左もわからない新卒の私を快く受け入れていただき、本当に感謝しています。そこでは法人向け専用線の営業や設備運用等を担当しました。

その後、東京の総合コンサル会社に転職し、1年間勤めました。大学卒業のころから「いずれは会社を継ぎたい」という思いがあったので、現場経験に加えて「経営者はどんな視点で判断しているのか」を実地で学んでおきたかったです。ただ、いろいろあって、いきなり採用担当になりました。自分がやりたかったコンサル業務とは違うため、戸惑いもありましたが、採用担当として優秀なコンサルタント

たちと一緒に働いたことで、プロフェッショナルな働き方や、会社の魅力をいかに伝えるか、といったことを徹底的に叩き込まれました。今の広報や採用の仕事に直結している経験です。スターキャットさんでの3年間と、コンサル会社での1年間が、シンクレイヤに入るための「土壌」をしっかり整えてくれたと思っています。現在、シンクレイヤに入社して8年になります。最初の3年間は岐阜の開発拠点でエンジニアとして通信端末の開発に携わりました。その後、約2年間、ネットワークエンジニアに転じ、お客様に導入するネットワークの設計や品質検証などを担当しました。次いで経営企画室で経営に関わるようになり、経営業務と

並行して広報を兼務し、会社のPR・情報発信にも取り組みました。昨年は常務取締役・技術生産本部長・広報室長という3つの役割を兼務し、技術・生産体制の強化と対外的な広報活動を同時に担いました。そして今年3月に社長に就任しました。

—その中で、特に印象に残っている仕事は。

山口:やはり最初に携わった端末開発ですね。業務理解という面だけでなく、社員の皆さんと長い時間をともに過ごせたことが、今の自分の価値観や判断軸の土台になっていると感じています。経験もなく技術的にも未熟だった私に、社内の多くの技術者の方々が惜しみなく関わってくださり、「あでもない、こうでもない」と議論を重ねながら端末を作り上げました。営業の方々にもあらゆる面でサポートしていただきました。当社の「総合力」と「社員の魅力」を肌で感じる事ができた原体験です。

### ケーブルテレビ業界の今後には「期待しかない」地域に根ざした情報基盤が最大の強み

—社長に就任するまでの8年間で感じられた、シンクレイヤの強みは何でしょうか。

山口:2つあります。ひとつは、お客様に「伴走

する姿勢の強さ」です。昨年の「ケーブルテレビ技術ショー2025」の展示ブースでは、『そこまでやるのか!?シンクレイヤ』というテーマを掲

げました。このテーマを決める社内議論を聞いていると、社員一人ひとりが本当に真摯にお客様のことを考えているのを感じました。当社には各ケーブルテレビ局の担当営業がありますが、彼らはまるでその局の代表のように社内で発言するんです。そこで出された課題等について、みんなで知恵を絞る文化があります。

もうひとつは、「選べるソリューションの幅の広さ」です。たとえばPONの規格一つとっても、E-PONやGPONなどいくつかの規格が存在しますが、当社はどちらも扱っています。通信はグローバルスタンダードな技術の世界ですから、世界中のソリューションがケーブルテレビ局さんにとっての最適解になり得ます。「ここしかやりません」と決めてしまうと、どうしても自分たちの都合をお客様に押し付けることになりかねない。当社の技術者たちは世界中の新技术を楽しみながら検証し続けており、「この課題にはこのアプローチができる」という幅広い提案が可能です。

—新しい技術をどんどん取り入れるのが、貴社の方針ですね。

山口:方針というよりも、性質ですね(笑)。技術者たちは常に最先端の技術を探していますし、新しい技術に出会うと面白がって、触りたくなってしまふ、そういう性質なんです。私も工学部卒でそこそこ技術が好きですが、社内には私が頭の上がないレベルの「技術オタク」がたくさんおり、毎日議論しています。

もちろんメリハリはあります。新しい技術を楽しむフェーズと、実際にお客様へ実装していくフェーズとは、きちんとギアを切り替えています。

—ケーブルテレビ業界全体については、どのように見えていますか。

山口:期待しかありません。人口減少や少子高齢化といった日本の課題は必ず訪れます。その解決策として、AIやフィジカルAIなどの技術が目立っていますが、それらが機能するためには強固な情報インフラが整備されていることが大前提です。

面をカバーするために大手キャリアの存在も重要ですが、地域に根ざした情報基盤を持つケーブルテレビ事業者の価値は、これからどんどん大きくなっていくと思っています。地域で暮らしている人、地域で事業を営む企業—

—そこにいる「リアルな人」と物」に届けられるのは、地域密着のケーブルテレビ事業者だからこそです。

今年3月には、CCJグループの(株)ケーブルネット鈴鹿(CNS)さん、(株)エヌ・シティ(NCT)さんと一緒に、50G-PONの国内初の商用サービスを開始しました。これはまさに、地域のインフラを持つケーブルテレビ事業者だからこそ実現できたことです。私たちがいくら設備を持っていても、光ファイバーが引かれなければ実現できません。

世界最速クラスの通信規格である50G-PONは、「実際そこまで必要か」という声もあるかもしれません。でも、革新的なサービスが生まれた時に、回線がなければそのサービスはどこにも届かない。美味しい水をつくる浄水

場があっても、水道管がなければ水は届かないのと同じです。インフラの整備は技術革新の大前提なのです。

—人口減少や少子高齢化を前に、ケーブルテレビ業界では悲観的な声も聞かれますが。

山口:私はケーブルテレビ事業のポテンシャルは高いと思っています。地域に情報インフラを有していることはもちろん、地域に密着していることが最大の強みです。技術は勉強すれば身につきます。でも、地域とのつながり、人と人とのつながり、企業同士の信頼関係は、いくら勉強しても一朝一夕には生まれません。たとえば、名古屋の人たちは、シンクレイヤは知らなくても(笑)、スターキャットさんの名前は知っています。地域における存在感は圧倒的です。

### エンドユーザーのニーズをよく知るケーブルテレビ事業者とサービスを磨いていきたい

—最後に、会社の将来ビジョンをお聞かせください。

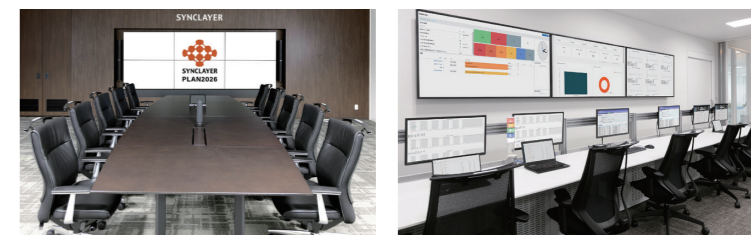
山口:一言で言えば、『伴走パートナーとして徹底してやっていく』ことです。

設備投資のサポートはもちろん、運用支援の面でも強化を進めています。ケーブルテレビ業界では技術者の不足が今後さらに深刻になっていくと思われます。当社が2024年3月に立ち上げた新事業拠点「SYNC Labo(シンク ラボ)」では、サポートセンターを設け、オンラインでの技術的な質問対応から、将来的には機器の遠隔監視・一次対応まで担える体制を構築していきたいと考えています。

また、Wi-Fiセンシングを活用した安否確認支援サービスや、ARを使った観光DXなど、インフラ側だけでなくサービス・アプリケーション側へのアプローチも始めています。「2030ケーブルビジョン」が掲げる「地域DXの担い手」の実現に向けて、技術を形にするパートナーとして貢献していきたい。私たちは技術こそわかりませんが、エンド

ユーザーが何を求めているかは、地域に密着されているケーブルテレビ事業者の方がずっとよくご存じです。だからこそ、ケーブルテレビ事業者さんからヒントをいただきながら、一緒にサービスを開発し、磨いていく関係を築きたいと思っています。

そしてそれを実現するのは、当社の社員です。当社には「愛・知・和(あい・ち・わ)」という社是があります。「愛=仕事を好きになろう」「知=知識を広げて課題を乗り越えよう」「和=互いを尊重して和を図ろう」。創業者の時代からの言葉ですが、私はこれを「和・知・愛」の順番だと考えていて、まず仲間同士が尊重し合える場があり、そこで知識を広げながら課題に向き合ううちに、だんだん仕事が好きになっていく。そういう価値観をしっかりと体現するような集団でありたいと思っています。



2024年3月に本社ビル付近に完成した「SYNC Labo(シンク ラボ)」。エンジニアリングルーム・デモンストラーションルーム、監視コントロールセンター等を備えている